

知的障害児に対する運動有能感を高める運動プログラムの開発 と効果の検証

(中間報告)

静岡大学教育学部附属特別支援学校 佐野 哲 広

Development of an exercise program that enhances physical competence for children with intellectual disabilities and verification of its effect

Special Needs School Attend to Shizuoka University, SANO, Tetsuhiro

要 約

生涯スポーツの実践者になるためには、運動有能感の育成が必要である。そして、運動有能感の育成を目指す運動指導では、明確な個人の目標があり、運動能力差に左右されないルールの工夫、共感的でわかりやすい表現方法でのフィードバックが有効である。しかし、知的障害のある児童生徒は運動技能獲得及び、その成果の実感に課題が大きい。そのため、知的障害児童生徒の運動有能感の育成には、児童生徒の実態に応じた運動プログラム及び日々のフィードバック方法の工夫が不可欠と考えられる。

本研究では、とりわけ、知的障害のある児童生徒に対する運動有能感を育むフィードバックの在り方について検討することを目的とする。研究Ⅰでは、主に「朝の運動」時間中に肯定的な言葉掛けを増やし児童生徒に伝わりやすいフィードバックで継続的な指導をした場合の運動有能感の変化を量的に検討する。そして、研究Ⅱでは、事例児童生徒を対象にし、発達心理アセスメント、運動スキル、身体面の3つの指標に注目して、継続的な運動指導を行う。指導後に、その3つの指標と運動有能感との関連について検討する。

【キー・ワード】 知的障害特別支援学校, 運動指導, 運動有能感, フィードバック

Abstract

In order to continue lifelong sports, it is necessary to nurture physical competence. In the exercise education aimed at nurturing physical competence, it is effective to set a clear personal goal, to devise rules that are not influenced by differences in physical ability, and to make feedback in empathetic and easy-to-understand words. However, for students with intellectual disabilities, it is difficult to acquire motor skills and to feel the results. In order to nurture physical competence of children with intellectual disabilities it is considered indispensable to devise exercise programs and daily feedback methods according to the realities of the students.

The purpose of this study is to examine how feedback to nurture children's physical competence for children with intellectual disabilities. In the Study 1, we examine the change of the physical competence quantitatively, by talking to students by affirmative words during the morning exercise hours and using a method of the plain feedback consecutively. In the study 2, I teach continuous exercise with pay attention to a student and his assessment of the development psychology, exercise skill, and the body. After the instruction, the relationship between the three indexes and the physical competence will be examined.

【Key words】 Special needs school for intellectual disabilities, Exercise guidance, physical competence, Feedback

問題と目的

一般の特別支援学校学習指導要領（平成29年，平成31年3月公示）で「生涯学習への意欲を高めること」や「生涯を通じてスポーツや芸術活動に親しむこと」が求められている。しかしながら，余暇活動の少なさが，知的障害者の思春期頃からの肥満傾向に影響するという指摘（増田ら2012）もあり，現状では課題も多い。このことより，ますます学校体育では，生涯を通してスポーツに親しみ，健康的に暮らせるようにすることが求められると言えよう。

生涯スポーツの実践者になるためには，「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子から構成され，運動場面での自信である運動有能感の育成が必要（岡沢ら1996）である。岡沢ら（1996）によれば，定型発達の場合，「身体的有能さの認知」は小学生から，「統制感」は中学生から，「受容感」は高校生から低下するとし，身体的有能さの認知を低下させない工夫，努力してできるようになったと実感できる授業，専門的運動スキルに偏らない授業の必要性を指摘している。また，井上ら（2008）は実践研究より，そのような明確な個人の目標があり，運動能力差に左右されないルールの工夫がある誰もが参加できる体育授業では，もともとの運動有能感の高低にかかわらず，運動有能感は高まりやすいと明らかにしている。つまり，運動有能感を高める上では，スポーツを通して「できた！」「やった！」という経験や，その実感を様々な人間関係の中でフィードバックされながら味わう学びが重要であろう。この体育指導でのフィードバックについて，深見ら（1997）の小学生を対象にした研究では，教師のフィードバックを役に立つ助言として受け止めた割合の多いクラスでは，タイミングよく，共感的に伝わりやすい表現方法を使って教師がフィードバックをしていると指摘している。深見らが，教師のフィードバック方法によって児童の受け止め方が違うことを明らかにした点は興味深い。

さて，知的障害のある児童生徒は運動技能獲得及び，その成果の実感に課題が大きい。そのため，知的障害児童生徒の運動有能感の育成には，児童生徒の実態に応じた運動プログラム及び日々のフィードバック方法の工夫が不可欠と考えられる。

多くの知的障害特別支援学校で，体力向上を目的として週日課に運動する時間帯を設けており，本校でも小学部1年生から高等部3年生までの児童生徒がそれぞれ取り組んでいる。そこでは，持久力向上の運動とラジオ体操（小学部は独自のリズム体操）が中心となっているため，より多様な運動経

験により動きを習得させることが課題として挙げられる。また、現状では、日々の運動への取り組みを的確に児童生徒にフィードバックできていない。そこで本研究は、知的障害のある児童生徒に対する運動有能感を育むフィードバックの在り方について検討することを目的とする。

方法

1 対象児童生徒

研究Ⅰでは、S特別支援学校児童生徒 57 名を対象とし、「朝の運動」の研究実践を通じた運動有能感質問紙の回答の変容を考察する。児童生徒 57 名の内訳は、小学部児童 16 名、中学部生徒 17 名、高等部生徒 24 名である。なお、本実践研究をするにあたり、保護者に研究の趣旨と研究資料の提供について紙面で説明し、同意を得た 57 名を研究対象としている。

研究Ⅱでは、個人差に対応するため、S特別支援学校の各学部 2 名ずつの合計 6 名を対象とし、「朝の運動」を中心とした研究実践を行う。そして、発達の心理的アセスメント（運動有能感を含む）及び運動スキル、体重や BMI 等身体面より運動有能感の育成に関する要因を考察する。

2 アセスメント実施

(1) 新体力テストの実施

10 月に小学部 5 年生・6 年生（6 名）、中学部生徒（17 名）、高等部生徒（25 名）に実施した。

(2) 運動有能感に関する質問紙の実施

10 月に、岡澤（1996）を参考に、小学部 3 年生以上に質問紙を実施した。同じ記号に丸を連続してつけることを防ぐために、A4 用紙 1 枚に質問を一つにした。また、意味理解が難しいと考えられる言葉には、注釈をつけて、言葉の意味を教師が言葉で確認した。

小学部児童は、個別に質問と選択肢を読み上げ、確認しながら質問紙に答えさせた。中学部高等部では、各学年の教室（生徒数 5 名から 9 名）で、1 名の教師が質問と選択肢を読み上げ、机間指導をして、言葉の理解や回答の有無の確認をして行った。

3 運動プログラムの設定及び実施（11 月～翌年 1 月）

主な活動を周回走と投動作とし、各学部の実情に応じ、次のように行っている。

	小学部	中学部	高等部
対象 (指導者)	16 名（5 名）	17 名（3 名～4 名）	25 名（3 名）
運動	①ボール投げ ②リズム体操 ③ラジオ体操 ④ 3 分間走 計 25 分	①体操 ② 6 分間走 ③キャッチボール 計 25 分	①ラジオ体操 ②12 分間走 ③キャッチボール 計 35 分

評価 方法	・個人ファイルに記録記入 ・その場での教師の肯定的な言葉掛けによるフィードバック	・個人ファイルに記録記入 ・その場での教師の肯定的な言葉掛けによるフィードバック	・個人ファイルに記録記入 ・その場での教師の肯定的な言葉掛けによるフィードバック
----------	---	---	---

4 実施後の運動有能感質問紙

今後、実践が終了次第、同じ質問紙を同じ条件で全員に行う。

現在の進捗状況と今後の予定

今後、実施後の運動有能感質問紙を実施し、実施前後の評価得点について、運動プログラム、新体力測定の結果、生活年齢との関連より検討する。

研究Ⅰの課題を踏まえ、4月から7月にかけて事例研究（研究Ⅱ）を行う。具体的な期間は、学校行事の影響の少ない時期を選び決める。障害がある場合、個人差が大きいため、心理発達アセスメント及び、日常中の言葉や行動の記録が必要である。個人の実態を的確に把握した上で、心理的、身体的、運動スキルの3つの指標より継続的なフィードバックに重点を置いた事例研究を行い、フィードバック方法と運動有能感の関連性、運動有能感を高める要因について検討する。

引用文献

- 井上寛崇, 岡澤祥訓, 元塚敏彦. (2008). 体育授業における運動有能感を高める工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究—運動有能感の高い児童生徒の視点から—. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 17, 103-111
- 岡澤祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎. (1996). 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研, 16(2), 145-155
- 特別支援学校学習指導要領解説. (2017) (2019). 文部科学省
- 深見英一郎, 高橋健夫, 日野克博, 吉野聡. (1997). 体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討: 特に, 子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に. 体育学研究, 42, 167-179
- 増田理恵, 田高悦子, 渡部節子, 大庭賢治. (2012). 地域で生活する成人知的障害者の肥満の実態とその要因. 日本公衆衛生雑誌, 59 (8), 557-565